

大鏡著作の文学史的意義

増淵勝一

平安朝院政期に出現した『栄花物語』と『大鏡』とが、日本文学史上に極めて意義ある転機をもたらしたことは周知の事実である。

従来の国史と作り物語とに多分の素地を得ていながら、そのいずれにも偏せぬ如き「歴史物語」という新しいジャンルを創始し、国史と作り物語との衰退をしりめに、後代、『今鏡』『水鏡』『増鏡』等のいわゆる「鏡物」と称される「歴史物語」とか、『月の行方』『池の藻屑』等の「擬歴史物語」を生ぜしめ、あるいは、『宝物集』

『無名草子』『野守鏡』等の「評論文学」に大きな影響を与えた功績は偉大と言わなければならない。また、同時代に流行した『打開集』『宇治大納言物語』『古本説話集』等の「説話文学」と相互影

響するものも多く、中世の『愚管抄』『神皇正統記』等の如き「史論書」に与えた影響も少なくはなかった。

岡一男先生「歴史物語」(河出書房「日本古典」解説。しかしながら、同じ「歴史物語」の始祖であり、その主題の時所位も同一の道長時代と摂関貴族社会とに求めつつも、これ

ら両書には文学史的に見て、著しい相違のあることを認めなければならない。すなわち、『栄花物語』が甚だ女流文芸の系統を引くのに対し、『大鏡』がこれに何ら追従しておらぬという点である。

『栄花物語』が女房日記の類を資料として、『源氏物語』に倣いつつ著作されたものであることは、岡一男先生の早く考察されておるところであるが、藤氏専権時代と栄華物語『日』、さらに、それが摂関家に関係する女房達によって著わされたであろうことも確かなようである。したがって、文章はたおやかで、あはれを旨とし、「六国史」につぐ歴史の実録を標榜しながらも、その実、冠婚葬祭を主とし、単調平板に流れ、藤氏執政をただ限りなくめでたく描出してゐるにすぎないのである。

これに反し、『大鏡』は、道長の栄花を追慕賞賛しつつも、摂関政治には批判的な院政者流の思想の持主の手に成ったらしく、岡一男先生「大鏡」(日本古典、藤氏執政をユーモアとアイロニーとクリティシズムとを混えて物語っており、用語や文体も簡潔で歯切れよく、少なくとも『栄花物語』に追従してゐる気配はさらにはないのである。

ところで、『大鏡』は『栄花物語』を主要な材料として作られた

であろうことは確かなようであるが^{平田俊孝氏「日本古典の成、肝心の源泉たる『栄花物語』について一言もふれていないのは注目すべきことである。『源氏物語』が影響を受けた『宇津保物語』や『伊勢物語』についてふれ、『狭衣物語』や『とりかへばや』に『源氏物語』の影響の徴証を見いだすのはさほど困難ではない。何よりも、『大鏡』と『今鏡』『水鏡』『増鏡』等との影響関係を思い出してみればよい。単に『栄花物語』に追従していないとか、対照的であるとかいう一言だけでは片付けられぬものを感じるのである。というのは、『栄花物語』からと同様に、結構や内容面で、かなりの影響を受けたと思われる『源氏物語』についても、『大鏡』は、やはり、何の断わり書きをしていないという事実が思い合われるからである。}

『大鏡』の芝居掛りの結構は、『源氏物語』の「雨夜の品定め」にも依拠したであろうことは、五十嵐力博士が早く指摘されたところである。^{『大鏡研究』(新潮社「目」)また、鈴木一雄氏は『大鏡』をはじめ『本文学論』(第五卷)}また、鈴木一雄氏は『大鏡』をはじめとする歴史物語の持つ物語性は『源氏物語』に直接の源泉を求めるときであると言われ^{『大鏡と後代文学』(国文学、昭和三十三年十一月号)}、峯村文人氏も、『源氏物語』にまで高められた物語文芸が前になくしては、『大鏡』の文芸性は見られなかったであろう」と述べられた^{『大鏡の文芸性』(同七)}さらに石川徹氏は、『大鏡』の批判精神が、『源氏物語』の持つ評論的方面を受け継いだものと考えられた^{『古代小説史稿』(四三九頁)}

この他、題材上、『大鏡』が『源氏物語』に暗示・影響を受けたであろうと思われる個所がいくつかある。

(1) 「後一条紀」問語の条に、

今日の講師の説法は、菩提のためとおぼし、翁らが説く事を

ば、日本紀聞くと思すばかりぞかし^{岡一男先生「大鏡」(日)(91P)。本古典全書以下同}

とあって、世継の翁たちが説く物語を「日本紀」にたとえている。

これは、『源氏物語』『螢』巻の、有名な「物語論」の中に、

(物語は)神代より世にある事をしるしおきけるなり。日本紀などは只片そばぞかし。これら(物語)にこそ道々しく委しき事はあらめ。

と、『日本紀』よりも物語にこそ人生とか社会とかの道理らしいものが詳しく記してあると述べる、この条を念頭に置き、それへの批判ないしあてつけとして、稿を成したように思われる。峯村文人氏も、『大鏡』の作者は、紫式部の言う、創作的形成力によってこそ人間の真実性が捉えられるという、「八物語」による真実把握のし方に刺激され、しかも、ほかならぬ『日本紀』のあり方を深めるということの上に、八物語と同じ価値を持つ表現の場を見いだしたのである」と言われている^{前掲論文}。両者の依拠関係は否定し難いと思う。

(2) 「兼家伝」の、三条院が仰せられたという逸話に、夏の

暑い日、尚侍綏子に、氷をお持たせになり、「これししばしもちたまひたれ。まるを思ひたまはば、今はとはいはざらむ限りは、置きたまふな」とおっしゃると、綏子は「かたの黒むまでこそ持たしたもうた

ので、院は、「あはれさ過ぎて、うとましく」覚えられたというのがある(218P)。この話は『大鏡』にのみ伝わるものであるが、氷を高貴な女性に持たせるといふ話は、『源氏物語』『蜻蛉』巻にも見

えている。すなわち、蓮の花の盛りに六条院で明石中宮が法華八講を営んだ時、薫が、白い羅を着けた女一宮の手に氷を持ちながら微

笑されているのかいまして、ひどく心打たれ、自分の北の方である女二宮に姉宮と同じなりをさせた上、氷を持たせて女一宮をしのぶけれども、到底その美しさには及ばず、結局失望するという話がそれである。片や三条院が綏子に氷を持たせて、その従順さにとましく感じられ、片や薫が女二宮に氷を持たせて、その女一宮に及ばぬことに失望するというわけで、一見、両者間に依拠関係はないようにも思われる。けれども、命令↓行動↓失望と展開する話の推移は全く同一であり、それがどちらも高貴な男女と氷との取り合わせによって行なわれているという事実は、やはり、両者の何らかの関連を推測させる。殊に、『源氏物語』の話が印象的なだけに、それが『大鏡』の作者の創作欲を十分刺激したであろうとも思われる。案するに、『大鏡』の逸話は『源氏物語』のこの一条が参考されて構成されたものではないだろうか。

(3) 『大鏡』には、当時の風潮にもれず、夢告とか占術とかの正当さを語った条が散見するが、『雑々物語』に出て来る「高麗人」は、繁樹の翁たちが「二人長命」であることを看破した上、その場に來合させた昭宣公(基經)の三人の君達、時平のおとど・枇杷殿(仲平)・貞信公(忠平)の将来を予告し、また、ある時には「ことさら怪しき姿」につくった小野宮殿(実頼)に、たちまち「貴臣よ」と呼びかけたという(341-350P)。これは、『源氏物語』「桐壺」巻で、「いみじう忍びて」つかわされた光源氏を一見した高麗の相人が驚きあやしんで、「国の親となりて、帝王の上なき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふことをやらむ云々」と、後の将来を予告する条からヒントを得たものであろう。もっとも、

こうした異朝人の観相については、『三代実録』に、仁明天皇嘉祥二年(八四九)來貢した渤海国大使王文矩が、第三皇子時康親王(光孝天皇)の諸親王中にあられるのを拝して、後來必ず天位に登らせ給う至貴の御相があると語った話が載っており、『古事談』「第六」には、醍醐天皇の御代に異国の相者が來朝して、天皇・前坊(保明太子)・時平・菅公等を相した話が記してある。また、『日本紀略』によると、渤海使の來貢は、宇多朝、寛平四年(八九二)正月、同六年(八九四)五月、十一月、同七年(八九五)五月、醍醐朝、延喜八年(九〇八)正月、同二十年(九二〇)五月にもあり、なお、朱雀朝、承平七年(九三七)八月には、高麗国牒が届いており、天慶二年(九三九)三月には、高麗の使人を太宰府で却帰しており、同五年(九四二)十一月には、隱岐国に新羅の舟七艘が寄着している。したがって、これらの史実を参考して稿を成したかも知れないが、光孝天皇の場合など、『三代実録』の記録が、話としては面白くなるであろうに別段用いられてもないから、恐らくは、『大鏡』の「高麗人」の観相見の話は、『源氏物語』「桐壺」巻のそれからヒントを得て成ったものと思われる。

これらの諸例は、いずれも『源氏物語』に材を得ているようでもあるし、得ていないようでもあるが、これが『大鏡』の作者一流の創作態度であって、『栄花物語』の場合と軌を一にしていることは明らかである。『大鏡』が『源氏物語』にも素材を得ていることは隠せぬ事実であらう。

『大鏡』のこうした態度は、さらに、女流文芸一般に対しての傾向のように思われるふしがある。『大鏡』の素材はかなりの数にのぼるが、そのうち作中に明記されているものには、『伊勢物語』(67・71 P)、『古今集』(97・101・131・250・306・337・70 P)、『醍醐天皇』、『御集』(76 P)、『村上の御日記』(81 P)、『一乗の法』(法華經)(92・253 P)、『職員令』(94 P)、『白氏』、『文集』(105 P)、『菅家』、『後集』(106 P)、『藥師經』(108 P)、『伊勢が集』(114 P)、『後撰集』(118・250 P)、『一条摂政御集』、『豊景』(170 P)、『三宝絵』(172 P)、『神楽歌』、『庭燎』(188 P)、『花山院』、『御集』(190 P)、『かげろふの日記』(227 P)、『維摩經』(283 P)、『貫之』、『集』(307 P)、『大井河行幸和歌』、『序題』(312 P)、『村上天皇』、『御集』(315 P)等があり、また、『日本紀』(91 P)、『千手院陀羅尼』(98 P)、『尊勝陀羅尼』(105 P)、『法華經』、『方便品』(173 P)、『法華經』(174・175 P)、『席田』(319 P)、『般若』、『心經』(321 P)、『あら田におふる』(322 P)、『求子』(325 P)等の文献名も見え、(兼家)の『長歌』(203 P)、『薬府』(182・208 P)、『申文』(205 P)、『ふる草子』(315 P)、『古き御日記』(332 P)等の記述、あるいは、和歌・引歌・俗諺なども少なくない。

この他に明記されていないが、前述の『栄花物語』、『源氏物語』をはじめ、『竹取物語』、『大和物語』、『史記』、『涅槃經』(92 P)、『枕草子』(131 P)、『和泉式部統集』(249 P)、『長恨歌』(255 P)、『王昭君怨』(265 P)、『上陽宮白髮人』(265 P)、『和漢朗詠集』(319

P)、『古記録・系図等も利用されたと考えられ、『今昔物語集』、『本朝文粹』、『江談抄』、『拾遺集』、『清慎公記』、『帝王編年記所拠皇代記』、『古事談所拠大鏡史料集』が引抄されているとする説もある
平田俊春氏『日本古典の成立の研究』八三一頁。

これら『大鏡』資料を一見するに、

- (1) 明示されている諸文献は、実録か実録風のものである。
- (2) 『大鏡』の素材として明示されている女流文献は少なく、一方、明らかに引抄していると思われるながら、その書名を伏せている女流文献はかなりある。

- (3) 明示されている女流文献は、延喜・天曆期を中心とした著作であり、明示されていない女流文献は、寛弘期以降を中心として成った好著である。

- (4) 明示されている諸文献は、総じて村上・円融朝以前の著作である。

ということがわかる。(1)については、「序」および「後一条紀」間語条に見られるように、『大鏡』が真実の歴史を述べようとしていた著作方針から言えば当然で、こうした実録(風)文献の明記によって、一層、この物語の叙述内容の信憑性を高めようとしたのである。これは今から考えると、いかにも文学的説話的な意図によるものとは思えぬが、当時の歴史概念の曖昧さからすれば、ごく自然のことであつたと思われる。『三代実録』や『日本紀略』の如き、純粹たる記録書においてさえ、流伝や伝説や噂話等を見つけ出すことが困難でない時代なのである。

次に、(2)(3)を検討するに、作中に明示されている女流素材は、『伊

勢が集』と『かげろふの日記』とに、倫子や彰子などの所出不明歌(283P)及び先行勅撰集から引抄された和歌若干のみである。また、寛弘期以降の名著作であり、引抄の量から言えば、男性文献にまさるとも劣らぬと思われる、『栄花物語』『源氏物語』『和泉式部統集』『枕草子』等に関しては何ら記すところがない。これは、『源氏物語』以外は実録風の素材であり、(1)の理由だけでは解釈できぬ問題である。つまり、『大鏡』は女流文献一般に対して口をとざし勝ちなのである。いま、『大鏡』の作者の、

藤氏と申せば、ただ藤原をばさいふなりとぞ、人はおぼさるらむ。さはあれど、もとすえ知ることは、いとありがたきことなり。(『藤原氏の物語』282P)

という史的態度や、全編至る所で話の出所を顯示していること、あるいは、出典として、『伊勢物語』『豊景』『村上御日記』『古今集』『菅家後集』等の男性著作は、必ずといってよいほど明記していることを思い合わせると、かくの如き女流文献に対する沈黙ないしは無視の態度は、決して無意識な所為によるものとは考えられないのである。

しかれば、『大鏡』の作者は、何故に、無関係ではいられぬ『栄花物語』や『源氏物語』等女流著作に対して、極力言葉を慎んでいるのであろうか。思うに、作者は、光栄ある先行大作に徹底的に反抗し、かつ批判しようとしたためではなからうか。なぜなら、世人の賞賛乱れとぶ中で、沈黙を守ること自体が一層の侮辱と批判を意味するから。もともと男性的素材が多いということが、この物語の男性的文芸たる性格を強めて、独自性を発揮せしめているが、

さらに、女流文芸を無視する態度にこそ、一層、新しい文芸を創造しようとする『大鏡』の作者の心意気を感じられるのである。あるいは、『大鏡』の作者は『源氏物語』に限らず、『栄花物語』や『枕草子』や『和泉式部統集』等も、「作り物語」という風にきめてつけたのかも知れない。

なお、同じ女流著作でありながら、『伊勢が集』や『かげろふの日記』がはっきり名を記されたのは、(1)及び(4)の場合のよって来るところと同様の理由に基くものであろう。共に実録であり、『伊勢が集』は『村上天皇御集』にその存在が確認されるし、『かげろふの日記』は円融朝天元五年頃に成立した作品なのである。岡一男先生の基礎的研究」。

この円融・村上朝以前の諸出典を明記するということは、『栄花物語』等への沈黙とは正に逆で、それらの諸出典に対する作者の共鳴ないしは賛嘆の意志表示と考えることもできよう。そして、こうした傾向は、ひとえに、作者の、天曆以前を聖代と考える、

世の中のかしこき帝の御ためしに、唐土には堯舜の帝と申す。この国には、延喜・天曆とこそは申すめれ。延喜とは醍醐の先帝、天曆とは村上の先帝の御事なり。(『師尹伝』131P)とか、

かやうに物のはえうべしき事どもも、天曆の御時までなり。冷泉院の御代になりてこそ、さはいへども、世は暮れふたがりたる心ちせしものかな。世のおとろふること、その御時よりなり。(『雑々物語』319P)という史観から生じていると思われる。つまり、『大鏡』の作者に

とって、天曆以前はよき時代なのであり、そこに咲き乱れた著作は物のはえうべうべしきもののひとつなのである（『かげろふの日記』は村上朝のものではないが、特に(1)の理由で、それから、寛弘期の作品とは区別されるから、古日記として、村上朝以前の著作に一括されたのであろう）。一方、道長時代は決してよき聖代とは思われず、したがって、作者は、そうした時代に生まれた著作に対しても批判的であり、かつ思想的にも記録的にもより正しい記述を伝えようと自負したに違ひなかった。その結果が(1)~(4)の如き傾向を生むに至ったのであろう。もっとも、『大和物語』などはその名が明記されていないが、これは、やはり、説話性が強く、『大鏡』の真实性を破るかも知れぬという懸念から、記されなかったものかと思う。

そこで、『大鏡』は、広義には真実の歴史を物語るということと、女流文芸一般への批判的態度を持していると言えるが、狹義には前代寛弘期の文芸——それはとりもなおさず女流文芸であるが——に對して、その傾向が一層強いと言いうるのである。

三

こうした『大鏡』における『栄花物語』『源氏物語』『枕草子』等寛弘期近辺の著作に対する無言の姿勢、つまり前代女流文芸に対する『大鏡』の作者の反抗的心意気は、またこの物語の主人公たる世継の翁の設定からも推察されるところである。『栄花物語』が摂関家に関係する女房達の手に成り、『源氏物語』が六条院や髭黒大臣邸の女房達の口誦筆受風に構成されているのに對し、『大鏡』は世継・繁樹両翁の話を受筆したことにしてある。これが『大鏡』の作

者の女房文芸への、明らかな反抗的構成の所産であることは、『雑々物語』に、

やんごとなくも、又下りても、間近く御簾の内ばかりや、おぼつかなき残りてはべらむ。それなりとも、おのおの官、殿ばら、次々の人の御あたり、人のうち聞くばかりの事は、女房・わらはべ申し伝へぬやうやははべる。されば、それも不意に伝へ承はらずしもさぶらはず。されど、それをば、何とかは語り申さむずる。ただ世にとりて、人の御耳とどめさせたまひぬべかりし昔の事ばかりを、かく語り申す……。〔391P〕

とあることによってもわかる。世継は、自分たちの話が女房や童たちのありきたりの噂話とは違つて、「世間の出来事で、きつと人々がお耳をとめるべきはずだと思われた旧い事」であることを力説して、暗に、『栄花物語』等の女房の物語りを批難している口ぶりである。

一体、翁・嬭の話などというのは、『大鏡』の作者が記している通り、「いとうるさく聞かまうきやうにこそおぼゆる」（『雑々物語』399~400P）のが常である。そうした通念を破つて、女房たちの語りに對抗させ、作者の自賛ともれぬことはないが、「これはただ昔にたち返りあひたる心ちして、又々もいへかし、さしいらへごと、問はまほしき事多く、心もとな」（同400P）い氣を起こさせるようにするために、作者は一つの伏線をはっている。

「序」に世継が語る、

昔さかしきみかどの御政の折は、「国の内に年老いたる翁・嬭やある。」と、召し尋ねて、古のおきての有様を問はせたま

ひてこそ、奏する事を聞き召しあはせて、世の政は行はせたまひけれ。されば老いたるは、いとかしきものにはべり。若き人達、ななづりぞ。(64P)

という条は、明らかな「翁」の権威付けである。この世継の言葉に直接該当する記録は見いだせぬが、『風土記』撰進の勅令の中に、「古老の相伝ふる旧聞遺事を言上せしめよ」という語があり、『常陸風土記』の冒頭はその勅を奉じて、「常陸の国の司、解す。古老の相伝ふる旧聞を申す事。国郡の旧事を問ふに、古老答へていへらく云々」となっている。また『古語拾遺』の「序」に「蓋聞。上古之世。未^二有^一文字^一。貴賤老少。口々相伝。前言往行。存而不^レ忘。書契以来。不^レ好^レ談^レ古。法華競興。還^レ讀^二旧表^一」とあり、『万葉集』卷三の持統天皇と志斐姫との贈答歌(235/237)には、この姫が天皇にうるさく昔話を奏上した由見えている岡一男先生「歴史文学の発生と展開」『国文学』昭和三十一年号。さらに、『古事記』中巻「景行紀」にも、倭建命と御火焼の老人との「新治筑波を過ぎて、幾夜か寝つる。かなべて夜には九夜日には十日を。」という唱和があり、老人はその功によって東の国の造になったとある。また「宇津保物語」「藤原の君」には、貴宮を懸想する上野宮が「よろづに思ほし騒ぎて、陰陽師、呪、博打、京童部、姫、翁、召し集めて」、その知恵で協力を仰ぐ条がある。

そこで、この『大鏡』『序』の世継の言葉には十分な信憑性がある。毫礫じいならぬ旧辞見聞に通曉した古老の性格が与えられていることがわかる。

世継は、「水尾のみかどのおりおはします年(貞観十八年八八七

六V)の正月の望の日」に生まれたというのが(「序」61P)、それで思い当るのが『竹取物語』である。この物語は貞観十八、九年(八七六、七)あるいは元慶二、三年(八七八、九)頃に成立したと考えられるから岡一男先生「竹取、丁度世継たちの出生時代がこれにあたるのである。」

一体、『竹取物語』は一見メルヘン風だが、実はノーヴェルで、作者は、車持皇子とか大伴御行とか石上麻呂とかいった藤原朝人の名を借り、貞観人の思想・感情を持たせて、それらを諷刺していると言われる。しかも、竹取の翁は作者自身に他ならず、自分の体験を三人称の体で手記したとも考えられる作品なのである岡一男先生の御教示による。そこで、『大鏡』が藤氏執政の批判性を有し、かつ、それが『竹取物語』成立期に出生時代を設定された、とてつもなく長寿の翁たちによって語られることを思い合わせると、『大鏡』の作者は必ずや『竹取物語』を念頭に置いてその稿を成したのであることが予測されるのである。一方、世継の翁たちが邂逅した雲林院は『竹取物語』の作者に擬せられている僧正遍昭が貞観年中に住んでいたところであるから『竹取物語評』、彼等がそこで藤氏執政を批判し物語ったのも、あるいは『竹取物語』の時勢相批判の精神を承けついで仕組まれたことが推測されて清田秀博、氏説、一層両者の密接なる関係がうかがわれるのである。

つまり、『大鏡』は「古事記」「竹取物語」に脈打つ旧辞の伝統を承けた世継の翁の語りを主とした長編であり、また『竹取物語』の批判精神を承けついで男性的創作なのである。このことによって、『大鏡』が『栄花物語』等の前代女流文芸に一見非連繋的な

は、作者がこの物語を『竹取物語』等天曆以前の文芸作品により、関連付けようとした結果に他ならぬことが明らかになるのである。

四

ここで平安朝文学を展望するに、女流作家として、弘仁期には、有智子内親王、貞観期（六歌仙時代）では小野小町がいるが、嵯峨天皇・空海・都良香・小野篁・菅原道真・文屋康秀・在原業平・僧正遍昭・在原行平といった錚々たる男性作家の輩出には遠く及ばない。また、次の延喜・天曆期にはようやく伊勢・本院侍従・中務、少々下って道綱母・微子内親王が頭角をあらわして、次の空前の女流文芸時代への先駆をなすが、紀貫之・平貞文・清原深養父・藤原兼輔・大江朝綱、あるいは梨壺の五人等、男性作家は依然として多い。寛弘期になると、はじめて女性が文壇に君臨することになり、世界文芸史上にも類を見ぬ一時期を現出する。賀茂保憲女・清少納言・紫式部・和泉式部・赤染衛門・出羽弁・六条斎院宣旨・小式部・菅原孝標女・成尋・阿闍梨母等々枚挙にいとまがないほどである。男性作家では、わずかに藤原公任・大江匡衡・能因法師・藤原明衡等の名が通っているくらいであろう。しかし、次の院政期になると、『栄花物語』や『讃岐典侍日記』等の女流著作もあるけれど、主流は再び『扶桑略記』『打開集』『今昔物語集』『江談抄』『今鏡』『梁塵秘抄』等の男性著作になる。

こうした文学史的な背景を念頭において、もう一度、『大鏡』を観ると、『大鏡』はそれ自体男性的著作であるばかりでなく、これが目指したところも実は天曆期以前の諸著作であり、それは寛弘期を中心とした文芸への反発・批判ともとれるから、女流文芸への反

発、つまりは男性文芸の尊奉にあったことが一層はつきりする。それ故、『大鏡』は、平安朝初期の、男性的文芸精神を復活したと言っても過言ではないであろう。と同時に、そのことは、村上・円融朝以前の文学が比較の実録的であったのに、一条朝以降の女流文芸の主流が「作り物語」であり、その全盛の余韻から脱け出し得なかった『栄花物語』等に対する反発から物されたとも考えることができるであろう。もっとも、『大鏡』を古めかすということ自体が平安朝物語文芸の因襲的手法から脱け出し得なかったことを物語るし、身近な存在の『源氏物語』や『栄花物語』等に、様式上・内容上密接不離の關係にあらざるを得なかった。また当時の読者の嗜好のままに説話的な題材をも駆使せねばならなかった。

しかし、それにしても、天曆以前に「物のほうへうべしき事ども」を観じた作者は、『竹取物語』をはじめとする平安朝前半期の男性的文芸精神に直結したのであり、そのことは、『大鏡』の文芸的意義を一段と妙ならしめることかと思う。そうした結果が、批判精神に富んだ実録風男性的『大鏡』を生ぜしめ、もののはれ風女性的な『栄花物語』や「作り物語」の『源氏物語』等との好対照を生んだのである。これは当時の他の著作には全く見当らぬことで、『大鏡』の独自性は、いわばこの男性的文芸精神——それは翁精神とも言うてもよいが——の再興にあったとも考えることができる。

なお、一般に院政朝の諸著作を男性的とするが、以上の考察から、根本は作者の性別であっても、題材や様式等の問題以上に、作者（作品）が男性的文芸精神をいかに把握・表現しているかということに、一層の重要さがあることがわかる。そうした意味で『大鏡』は真の男性文芸ということができると思う。